

(21) 久良沢(きゅうらざわ) 鉱山跡(改訂版)

近傍の鉱山跡探査後に、時間に余裕があったので、10年ぶりに本鉱山を再訪した。既報には現地写真が掲載できなかった。今回ようやく10年ぶりに写真を手に入れた。それに、ガーミンによる経路ログも手にした。坑口跡は先の報告では2つと報告したが斜面垂直方向一直線上に近接して3つを確認した。最下位の坑口まではズリ斜面に向かって左側を大きく迂回すれば不安なく登り上がれる。が、同じ岩盤に切り開かれた残りの2つへの斜面は結構急である。そのまま登っても、下りで滑落するかも知れない。下りの場合も考慮して、足場を確り切り出して登る必要がある。スコップ類、それに確保用のロープがあれば安心である。

坑口跡群の下の斜面はズリ斜面である。同様に急斜面である。ここでも、ズリの採集時にはロープがあった方が安全であろう。また、訪問者が多人数の場合には、落石に十分に注意する必要がある。

この久良沢鉱山は、足尾山塊に多数あるマンガン鉱山の中の1つである。ズリには表面が黒ずんだマンガン鉱石が一杯ある。が、殆どは低品位である。が、マンガン鉱石には変わりはない。簡単に見つかるような良品は既に先人達がいっているはずである。好みの良品を探し出すには、じっくりと腰を据えて取りかかる必要がある。

とにかくこの鉱山は主要道15号に隣接しており、車でのアクセス最良の鉱山の1つである。訪問に当たって時間的余裕があれば、他の坑口跡、一帯の地層、岩石を探査するのも良い。また、足尾には幾つかの鉱山関係の施設跡・観光施設もある。坊主のことも考えて、日程に入れることを勧める。

この鉱山跡の名称について疑念が生じたのでそれについて記述する。入手した参考文献(2)によれば、この鉱山名は「久良沢」ではなく、「大岩」である。この沢を、この鉱山跡から南へ大凡2km遡った沢の左岸上部に「久良沢鉱山」、そして南の直ぐ近傍に「南久良沢鉱山」が付録の地質図中に明記されている。興味の湧いた方は添付資料を参照して欲しい。

2019年6月

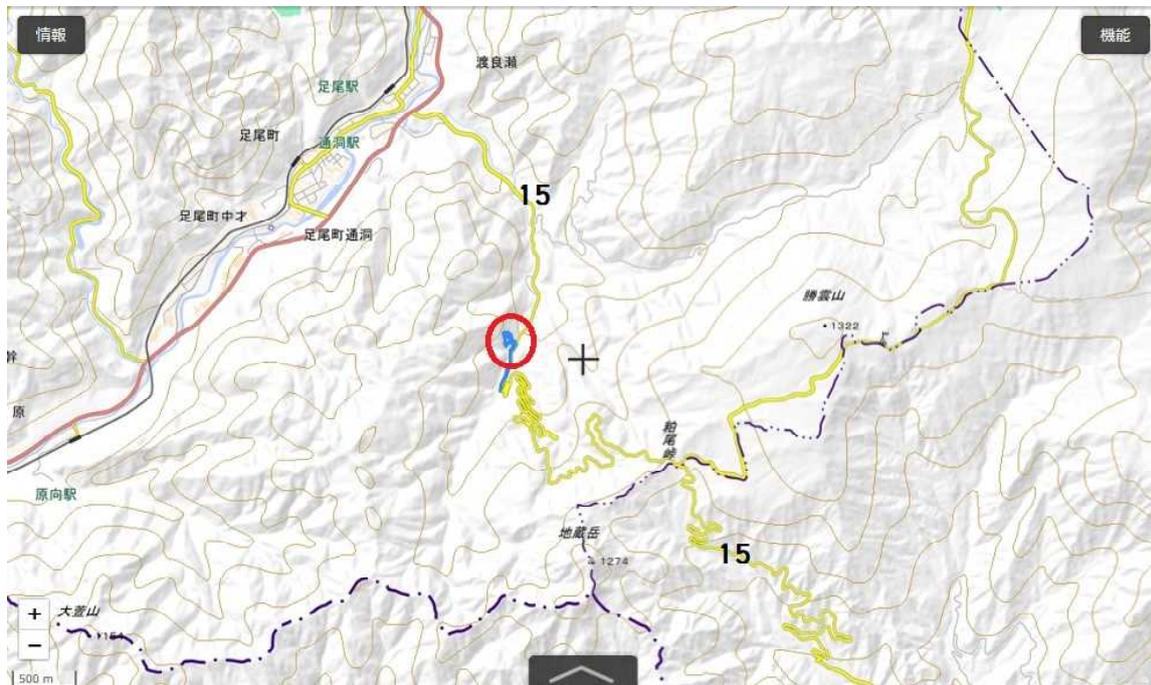


図1 中央付近の赤丸が久良沢鉱山跡。著者は栃木市から15号の山道を北上し、粕尾峠を乗り越えて現地に行き着いた。足尾の方が近い人には足尾から15号を南に下った方が宜しい。足尾には鉱山に関する施設がいくつもあるので、帰りには、それらを訪問することを日程に入れるのも良いであろう。

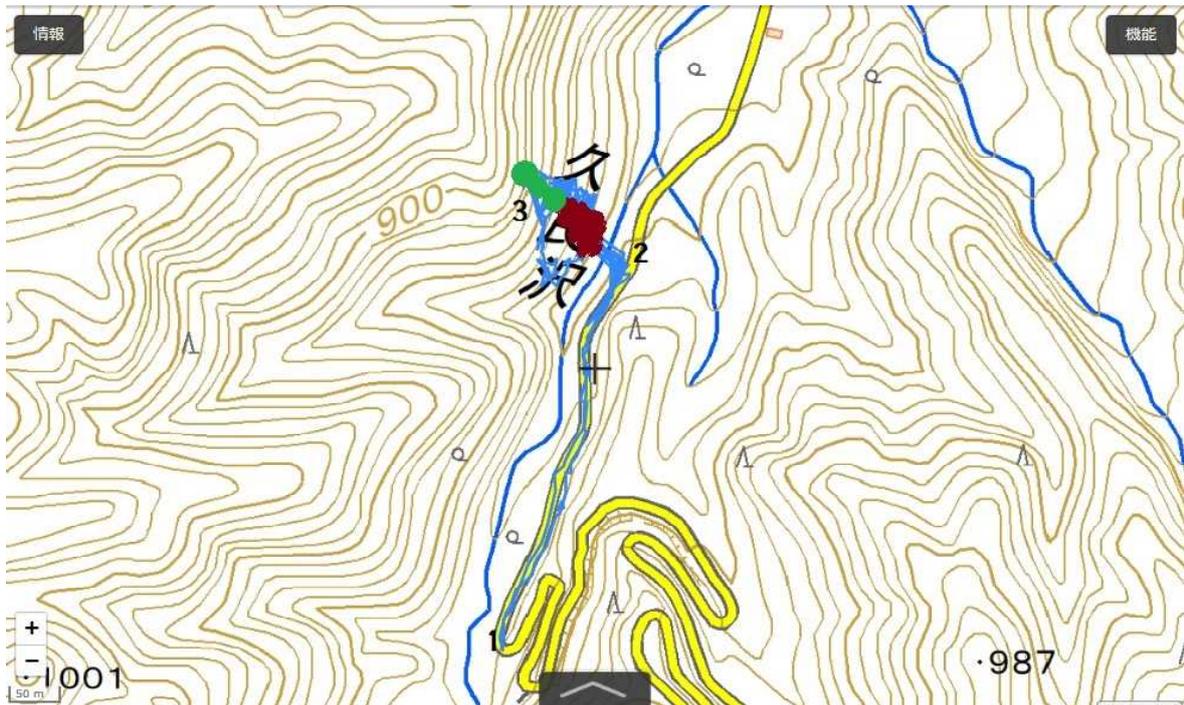


図2 図1の部分拡大図。黄緑丸が坑口跡、茶色ベタがズリ。車は番号1の付近に駐車。徒歩で番号2の所まで行き、ここから沢を横断して対岸に渡った。番号2の前後にも車1台くらいは駐車できる余地はありそうであった。なを、当日ガーミンの受信状況が芳しくなく、経路ログのズレが大きかった。現地と整合するように、そのズレに大幅な修正を加えて、提示している経路ログとした。

鉱山跡写真



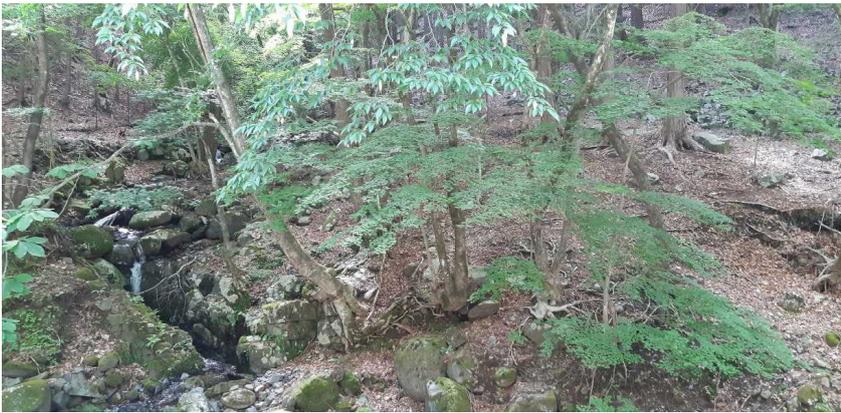
番号1 車を駐車した付近に小さな祠があった。記銘は見当たらなかった。忘れ去られた祠ではなさそうである。新しいお供え物があるので、下流にある部落の人に訪ねれば、由来が分かるかも。かつて、番号2の所にあったという（参考文献（I）による）祠なのかも知れない。



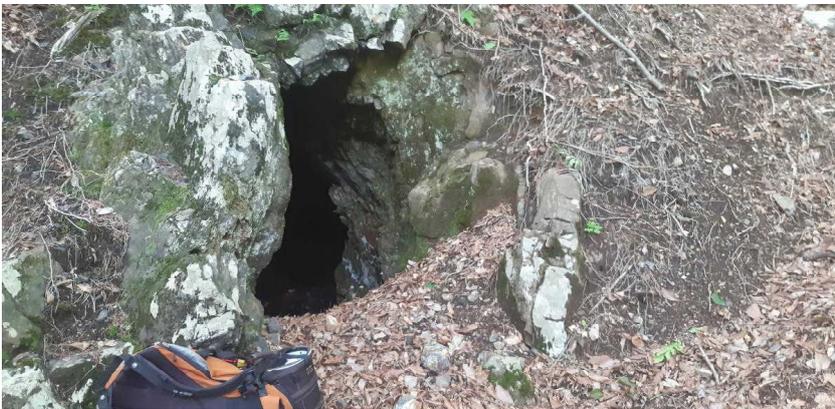
番号2-1 番号2の所である。右側の岸壁にはコンクリートが吹き付けられている。このあたりで、左側にある沢に降りる必要がある。道路の沢側の擁壁はズッと垂直で高い。この付近ならば、どうにか降りられよう。



番号2-2 道路から沢の対岸を見ている。沢を渡って、このところ上がる。ここより上は急なズリ斜面となっている。黒っぽい転石が一杯である。沢は幅は狭く、余程の大水でない限り、渡河は容易である。



番号2-3 番号2-2の更に左側を見ている。左側に支流沢が見えている。ズリ斜面は急なので、坑口跡には、沢を渡って、番号2-2の所に立ったならば、この支流沢の方向に向かって進み登って行く。すると右上方に消えかかっている山道がズリ斜面上部に向かっている。それを進む。図2中に描かれている水色のルート曲線の通りである。



番号3-1 3つあった坑口の一番下の坑口跡である。何故か、奥は余り深くない。



番号3-2 2つ目の坑口跡。これも奥は余り深くはない。



番号 3-3 最上部の 3 つ目の坑口跡。

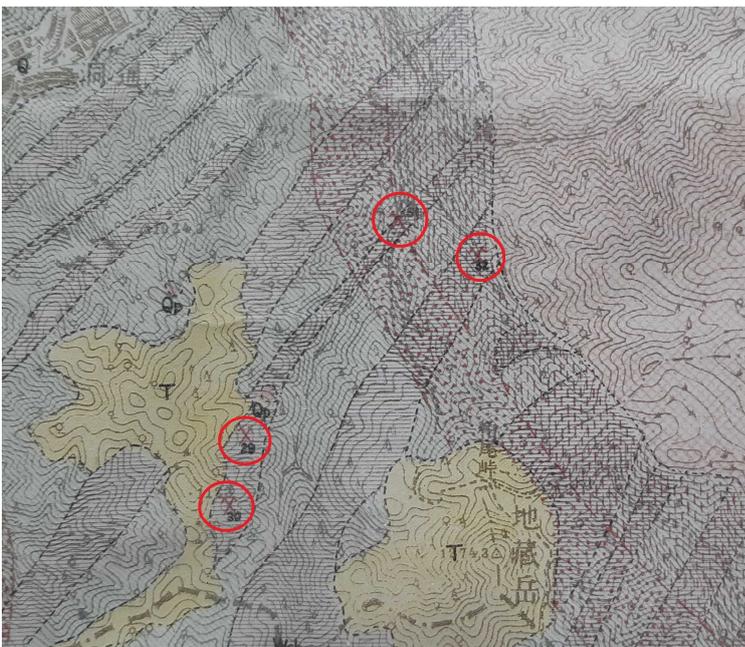


番号 3-4 番号 3-3 で示した坑口に近接しての一葉。斜め下奥深く坑道が続いていそう。上述している 3 連坑口の中の主坑口と思われる。

参考文献

(2) 「足尾山地地質説明書」、栃木県、昭和 32 年 (1957 年)。

添付資料



参考文献 (2) の地質図の一部分。鉱山記号と番号の付いていた 4 カ所を赤丸で囲っている。29 が「久良沢鉱山」、30 が「南久良沢鉱山」、31 が「大岩鉱山」、32 が「大日沢鉱山」。背景図は国土地理院の古い地形図である。が、現在の地形図とほぼ合致している。番号 31 「大岩鉱山」が、今までの「久良沢鉱山」の位置とほぼ合致することが分かる。

(21) 久良沢(きゅうらざわ) 鉞山跡

参考文献(1)を手引きに探査に行った。小山から栗野を經由し足尾に抜ける国道122号の、粕尾峠の北側の足尾側にある。地形図中の赤印の位置である。参考文献(1)では、チャート岩盤が露出し、祠がある箇所と記載されているが、現在では完全にコンクリートが巻かれている。祠は移動され、道路を遡った急カーブの所にある。赤印の箇所の道路から、沢の対岸を見渡すと、転石がよく転がっている斜面がある。鉞山のズリである。沢の水量が多くなければ、簡単に沢をわたり、対岸のズリに入れる。徒歩は1分もかからない。ズリで黒くて重そうな石を割ると、ピンクや赤っぽい破断面を持った石は見つけられよう。マンガン鉞石である。

ズリの上方に、廃坑口が上下に2つを確認した。この箇所は「新山新坑」。参考文献(1)には、近傍に「大滝坑」があることが紹介されている。それらしい方向に行ってみたが、新しい砂防ダムしか目にする事ができなかった。砂防ダムで消滅してしまったのかも知れない。



地図 国土地理院2万5千分の1地形図「足尾」

探査日 2008年9月、その他の日

参考文献

(1) 鉞物産地案内シリーズ「鉞物産地をたずねて」<増補版>梅沢俊一、1995年、自費出版

鉱山跡写真

撮影した写真がどこに行ったか見失ってしまった。後日撮影に訪れよう。

採集鉱物写真

薔薇輝石はよくあった。が、大した物が採集できなかったので写真は未掲載。

品名 薔薇輝石 (ロードン石 RHODONITE ロードナイト)

化学組成 $Mn(SiO_2)$ 、 $Mn_5Si_5O_{15}$ ケイ酸塩マンガン

色 ピンク、濃い紅色

断口 貝殻状、凸凹状

解説

(1) 薔薇輝石、菱マンガン鉱(成分 $MnCO_3$ 、俗称炭マン)、パイロクスマンガン石(成分 $MnSiO_3$)の3者は、初心者には見分けが難しいようである。参考文献(2)の鉱物コレクション「ばら輝石」、及び参考文献(3)のロードン石に良く似ているので、当面薔薇輝石としておこう。

(2) 永く暴露しておくとも黒色となる。多分マンガンが酸化して、二酸化マンガンとなるからであろう。試料の幾つかで、表面が黒いのはそのためであろう。

(3) 試料では層状のピンク色帯が薔薇輝石。

(4) 黒色ではない金属マンガン鉱は全て「炭マン」という。炭酸化物だけに限らないで使用されてきた。